

## 第 6 回館長講座 「博物館での事件」

司会：だいぶ寒くなってきた中、お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。  
第 6 回の館長講座ということで、「博物館での事件」と題して、鷹野館長がお話し致します。  
鷹野館長よろしくお願ひ致します。

(拍手)

館長：皆さんこんにちは。…今日は 6 回目ということで、だいぶ慣れてきたところなのですが、前回「博物館と災害」ということでお話をしましたが、話が途中で終わってしまったところがありますので、その続きを最初にお話しさせていただきます。

続きというのは、戦争と博物館の関わりの中で、動物園でどんなことがあったのか、ということです。動物園と戦争の関わりということで、第 2 次世界大戦中のヨーロッパでの出来事を、ふたつ挙げます。

ドイツ軍のロンドン空襲で起きた被害、それからイギリス軍のベルリン空襲によって、生じた出来事です。1940 年 12 月 4 日のドイツ空軍のロンドン空襲ではロンドン動物園に命中して、ライオン・トラ・クマなどが檻から逃げ出したのを、動物園当局が銃殺しました。また 1941 年 9 月 7 日～8 日 イギリス空軍のベルリン空襲ではベルリン動物園に 3 弾落下して、象 1 頭・ラクダの飼育係 1 名死亡したほか、柵の中のサルが狂乱状態になったので多くを銃殺しました。

逃げ出そうとした動物たちに罪はないはずですが、みな殺されてしまう。飼育されていた動物たちは、戦争の空襲で殺されるんじゃなくて、飼っていた動物園が殺してしまったということですね。ちょっと悲しいなあ、と思いました。

でもこれはヨーロッパだけのことでなくて、日本でも同じだったわけです。

上野動物園と戦争との関わりということでは、戦争のさなかに戦地から動物が送られてきたということもいくつかありました。

1939 年中国戦線から功労働物ということで、動物園に贈られてきたものがありました。フタコブラクダ 2 頭、モウコウマ、シマウマ、ロバ 2 頭、ラバ 3 頭、イヌ 2 頭。そのうちのロバですが、そのうちの 1 頭は「一文字」号と名付けられていて、これは盧溝橋事件ろこうきょうの時に弾丸運びに活躍したロバだというので、その功労働物、ご苦労さんでした、ということを入れたんでしょうか。もう 1 頭のロバには「盧溝橋」と名付けられていたということ

でした。

この「一文字」号は、1965年の3月23日に亡くなっています。

1942年の5月には、これも中国に派遣されていた軍からヒョウが送られてきて、これは「八紘<sup>はっこう</sup>」と名付けられていたという写真が残っています。この「八紘<sup>はっこう</sup>」はまたあとで出て来ます。

それから、海軍からはコモドオオトカゲを捕まえたからというので2頭送られてきた。東条首相、杉山参謀総長、当時、軍の首脳ですね、この人たちの名前でホクマンヒグマ、チョウセンクロクマ、マンシュウイノシシなどが送られてきて動物園に入れられました。

それから、ちょっと驚いたのが、海軍の駆逐艦「風雲<sup>かざくも</sup>」が、キスカ島撤退の時にホッキョクギツネを捕まえて、それを送ってきたというんですね。キスカ島撤退っていうのは、これはもう私にとっても歴史上の出来事ですけれども、アリューシャン列島の西のほうで、アメリカ本土にかなり近いところにある島、ここからほとんど無傷のまま撤退できた、奇跡の撤退といわれているんだそうですが、そういうさなかにギツネを捕える余裕があったのか、ちょっと驚いた次第ですが、このギツネは1945年の6月まで生きていました。

さて、上野動物園の動物の悲劇ですが、東京都の行政長官という人から、今でいう東京都知事ですね、そこから、1943（昭和18）年の8月16日、猛獣を処分しろ、という命令が出されました。

これ、軍が命令したといわれていましたが、軍ではなくて、今の都知事の立場の人からです。軍の要請ではなく、自発的なのとか、そういう処置だったようですね。B29による空襲が激しくなるのは1944年秋からです。

早速8月18日に、メスのライオンと、先程のヒョウの「八紘<sup>はっこう</sup>」が、殺されました。この「八紘<sup>はっこう</sup>」は剥製となって現在、高知市にいます。

それからここに挙げましたように、8月22日はライオンのアリーとカテナ、それから1937年から飼育されていたオスのトラ、メスのチーター。

26日には、ヒョウ、ツキノワグマ、それからチョウセンクロクマ、これ先程送られてきたと紹介したクマ、ですね。ホクマンヒグマもそうです。ホッキョクグマ、マレーグマ1頭、これらが処分されていったわけです。

そういう中で、皆さんよくご存知だと思いますが、秋山ちえ子さんが毎年8月15日にラジオで朗読をしていました「かわいそうなゾウ」の悲劇もこの中にありました。

3頭のゾウを殺すために毒入りのえさを与えたんですが、ゾウたちは毒入りのえさを食べ

なかった。そこで、餓死させるために、絶食させていった、ということでした。

ジョンとトンキーとワンディーという3頭のゾウがいたんですが、ジョンは8月29日、ワンディー、これは絶食18日目の9月17日に、トンキー、これは30日後の9月23日に死亡しました。

でも、絶食させたからといってこれほど長く生きるはずはなかったんですね。その背景には、ゾウの担当の飼育係がわずかですがずっとえさをあげていたのだそうです。このスライド作っていた時、とっても悲しくなってしまうと、本当に悲しいことだな、と…。

それで、住むゾウのいなくなった象舎、これが1944年夏には棺桶の保管場所になったりしました。カバは猛獣ではないということでしょうか、処分対象とはならなかったんですが、えさが不足していったために、これもやはり餓死しました。

この、カバの京子というのは、前回おいで下さった方にはお名前をお話したと思うんですけども、関東大震災の時におびえてしまって、水の中に潜ってしまった、そして出てこなかったという繊細なカバだったわけですが、このカバの親子もやはり、餓死してしまいました。とてもかわいそうなことでした。

動物園でのことを挙げましたけれども、ここでは上野動物園の例でしたけれども、日本の他の動物園でもいろいろのことがあったということです。

さて、これからが今日の本当のテーマでして、あと博物館に起きた様々な事件、昔のものから現代に近いものまで、紹介していきます。

まず、盗難なのですが、非常に残念ですけれども、盗難事件、これはあとを断ちません。博物館・美術館が特別な所だといってもやはり、盗むほうからすればこれはお宝の宝庫ですからね、そういうことになってしまいます。その為に展示室の中に監視員がいたり、あるいは監視カメラが無言で監視をしているというのは、利用者というか、博物館を見に来た人からすれば、非常に不愉快な感じを持つかも知れません。

しかし、たとえ一人でも、そういう不心得な人がいるという中では、仕方がないことかな、と思いますし、その点をご勘弁願いたいと思います。

では、どんな対策がされているか。

夜間休日の対策というようなことで、建物の出入り口などの要所に赤外線警報装置とか、あるいは高周波による警備装置を付けたりする。都会でこういうのがあるんですけれども、よく引かかるのはネコだそうです。

外部の警備会社に依頼するということがありますし、それから展示室の中の対策、これ

はもちろん展示してある資料そのものを簡単には移動できないようにしっかり固定することがあります。動かせる資料、古代の土器片とか瓦とか触っていいですよ、手に取ってみてください、というような展示がありますけど、ああいうのは持って行かれても仕方がない、というような覚悟の上で、そういう場を設けているところが多いようです。

それから、小さい資料、これはケースに入れて鍵をかけておく。これだけのことで、少なくとも、出来心による盗難は、防げるようです。あとの事例で出て来ますが、展示ケースのガラスを割って持って行くことがありますけど、それに対してはガラスを厚くして、簡単に割れないようにするとか、盗難の予防装置を付けておくとか、鍵はしっかりかけるべきところはしっかりと鍵をかける。

それから肝心なことなのですが、なるべく死角のスペースを少なくする。隠れられるところを作らない、というような基本的な処置というのが肝心なところですよ。

子ども向けの美術館の紹介の本で『美術館ってどんなところ』（フロランス・デュカトー 著、シャンタル・ペタン イラスト 青柳正規監修 西村書店 2013）という本の中にこんなイラストがありました。結構面白かったので紹介致しますが、この左上の青い服を着た痩せたおじさんが、展示室の中で絵を観て「この絵、いいなあ」と思っているわけですね。彼はその後、この彫刻のかげに隠れて、ひっそりとしています。閉館時間が来て、もう閉めよう、と。この人、館長さんだそうですが、館長さん、また明日、ということで警備の担当の人も帰って行きます。隠れていた彼はこっそり出て来まして、誰もいない展示室の中で、こんなことするかどうか知れませんが、踊りを踊ってみたり、遊んでみたりしているわけですね。

そして、一時を<sup>いつとき</sup>過ごして、先程のこの絵の前に。壁から外して、袋の中に入れてしまいます。そしてなぜか、こんなことしなくていいのに、彫刻と一緒に<sup>いつとき</sup>おやすみなさい（笑）。

次の日、ああ、よく寝た、というわけです。開館時間が来ると、一般のお客さんのふりをして、じゃあ、またね、とか言って帰るのですが、ここから先は、子ども向けですので、こんなになっています。

じゃあ、またね、とあいさつをした、彫刻の足に、多分セーター着ているんでしょうね、これ。糸が引っかけ、そのままずっと家まで行って、捕まっちゃった、っていう（笑）。

ただ、これはよくあるパターンですね。死角の見えないところに隠れていて、そして閉館した後、盗み出して、開館と同時に、入ってきたお客さんのようなふりをして出て行くというパターンで、よくあるんだそうです。

実際にいくつか起きた事件ですが、<sup>しいなのりたか</sup>椎名仙草さんがまとめられた本（『博物館の災害・事件史』雄山閣 2010年）の中からいくつか紹介します。

日本の博物館での最初の盗難事件は、明治5年（1872）6月6日、できたばかりの文部省の博物館で起きました。

新聞報道によりますと、「26種の金銀貨」が盗まれた、ということですが、その後、6月9日に太政官布告、太政官からのお知らせ、今でいう「官報」でしょうかね、それで出された布告では、「元禄大判1枚ほか19枚の金銀貨」と記されています。枚数に違いはありますが、太政官のほうが本当なのでしょう。

わざわざ太政官布告、今でいう「官報」に博物館での盗難を載せたのは、盗まれたものが御物だったからだそうです。天皇家の持ち物を盗んだふとどきな奴、というので、こういう布告をしたんだそうです。

これを受けて議論が起きたのは、こういうことがあるんだから、博物館に展示するのは実物ではなくて模造品でいいじゃないか、と、むしろそのほうが安全じゃないか、というような意見もかなり強くなったそうですが、博物館の当事者としては、博物館は実物を展示することに意味があるんだ、ということで、強く突っぱねたそうです。

犯人は7月17日に捕まりまして、お医者さんの息子だそうで高知の遊学生。高知から東京に出て来て、青雲の志を持っていたんでしょう。名前までわかっていまして、<sup>よしもとたくま</sup>吉本琢磨17歳だそうです。

自白によりますと、昼間、展示室に入って聖像、聖なる像の後ろに隠れていて、夜に入って盗みたるよし、ということだそうです。さっきのパターンですね。

それから「<sup>やましたもんない</sup>山下門内博物館」の、金の<sup>しやちほこ</sup>鯨の<sup>うるこ</sup>鱗が盗まれた事件。

明治9年の4月28日夜、暴風雨の夜だったそうで、その時に、展示してあった金の鯨の鱗が、はぎ取られていました。

<sup>きんしやち</sup>金鯨の鼻先から大体5寸、15センチくらいのところの左側の鱗4枚が、はがされていたのが見つかっています。

この当時の報道によりますと、この鱗は<sup>もんめ</sup>75匁で112円50銭相当、ということですが。重さのほうから現在の価格に直してみますと、281.25グラムで変動はありますが、大体、現在の価格で130万円くらいようです。遺留品があつて、古いやすりが1本とカンナの刃が一つ、小刀が1本捨ててありました。

捕まった犯人の自供によりますと、112円50銭相当のものを盗んだんですが、実際に売れたのが46円55銭<sup>りんもつ</sup>3厘8毛、だった。現在の価格では、54万円くらいでしょうね。

この犯行の実態と動機、結末なんですが、暴風雨に乗じて博物館に忍び込んで犯行に及んだということです。犯人は東京府士族の山田義高25歳。士族ですが、生活にはだいぶ困窮していたんでしょう。非常に困っていて、女房を<sup>おおたき</sup>大多喜の娼妓にだした、つまり売っ

やったわけですね、奥さんを。犯行に及んで、金鯨の鱗を 1 枚売り払って得たお金で売り払った奥さんを 1 回買い戻している。請け出していることをしている。残りを鑄つぶして売って生活していたんですけども、金の耳かきにしていたと。それを卸す店、そこに持って行って発覚したんだそうです。

7 月 27 日に逮捕されて、裁判の結果、懲役 10 年でした。

この後、金鯨は明治 11 年に名古屋城の天守閣に戻されるんですが、戻ってから後、昭和 12 年の 1 月にまた鱗が狙われて盗難に遭っています。

それから、「京都博物館」。「恩賜京都博物館」と書きましたが、現在の「京都国立博物館」です。この頃は、皇太子殿下、大正天皇のことですが、皇太子殿下御成婚記念ということで、皇室から京都市に下賜されて、そこで「恩賜京都博物館」となったわけです。

ここでの、御物盗難未遂事件ですが、大正 13 年の 6 月 7 日の午後 2 時頃、こぶし大の石を持った犯人が御物 3 点の入ったガラスケースに石を投げつけて、ガラスを割りました。

割って、ガラスケースにかなり大きな穴を開けたんですが、その時にあまり大きい音があったので、これは見つかると思ったんでしょうか、驚いて、なにも取らずに窓から飛び降りて逃げて行きました。

犯人は 1 年後に捕まりました。陶器関係を扱う人だったようです。この千鳥香炉の青磁に魅了されて、石を持って入場して計画的にやった、と自白したそうです。

同じケースにあったのが、これも有名な金銅摩耶夫人像。これも一緒にあったんですが、このきれいな香炉に魅せられて、盗もうとしちゃった。

それから、現在の香川県の「観音寺市郷土資料館」で、当時「讃岐博物館」といったところでも、盗難の事件があった。

これは現在でも続けて出されています「博物館研究」という「日本博物館協会」の機関誌に載っている記事ですが、これによりますと、刀剣および模型の大判小判その他、これらが盗難に遭いました。

これは犯人は見つからなかったようですが、模造の大判小判、これを本物だと思い込んで犯行に及んだらしい、ということがいわれます。

それから昭和 7 年（1932 年）、東京上野の「東京帝室博物館」に展示されていた御物が盗難に遭いました。

昭和 7 年の 4 月 15 日の朝、「表慶館」、これは現在でも残っておりますけれども、上野「国立博物館」の正面が本館で、その左側に建っている重要文化財の建物です。この頃は

「東京皇室博物館」の本館の建物が関東大震災で壊れていましたので、この「表慶館」が主陳列館となっていました。

今週の月曜日、他の行事で東京国立博物館に行ったのですが、「表慶館」ではブルガリの展覧会をやっているんですね。宝石の展覧会なんかやっている。変わったなあ、と思いました。

その「表慶館」のガラスケースが壊されまして、その中にあった高さが2尺、1尺5寸、1尺、60センチくらいと45センチくらいと30センチくらいの高さの3体の仏像が盗まれているというのが発見されました。

盗まれた仏像は、明治の始めに法隆寺から皇室に献納された法隆寺献納仏の28体のうちの3体、でした。

後の犯人の自白によりますと、前の日の午後4時頃に、普通の一般の観覧者として入館しまして、そのまま大きな仏像の陰に隠れて、夜明けを待って犯行に及んだということでした。

この展示室の部屋の窓、これは内鍵でしたので、内側から開けて、外に出ることができましたし、窓に金網などが貼られるということはなかったそうです。

犯行の実態が自白でわかっていますが、夜4回見回りをするんですね。その見回りの合間を縫って犯行に及んだということで、午前5時、最後の見回りの後だと思えるんですけども、5時から7時、朝方に犯行に及びました。

ケースの錠前を肥後守のナイフを使ってこじ開けようとしたけれども開けなかつた。それで、部屋の中にあった監視員が座る椅子をぶつけて、展示ケースのガラスを壊した。そして、3体の仏像を持ち出しまして、部屋の窓から外へ飛び降りて、逃走したということです。窓の外には、飛び降りたときに付けられたとみられる地下足袋の跡が残っていました。

この犯人はこれも誤解していたようで、金銅仏は金色していますから、金製、金無垢だと思ったんでしょうね。そして犯行に及んだ。盗んだ後、1体にやすりをかけたり、硝酸をかけたりして確かめたんですが、残念ながら、金ではなかつたと。彼にとって、残念ながら、と(笑)。

そこで、骨董品として売ろうとして、そこで足が付いたということですね。自白に基づいて探したところ、1体が愛人宅から、それから1体は上野公園の共同便所から、もう1体、これは代々木富ヶ谷の小川に捨てた、という自白があつて捜索したところ、溝の泥の中から発見されたということで、3体とも無事に戻ったということです。

今度は絵の盗難なんですけど、「京都国立近代美術館」での事件で、先程の「京都国立博

物館」とは別です。戦後できた近代美術館ですが、そこで、ロートレックの「マルセル」の絵が盗難に遭ったという事件がありました。

昭和 43 年の 12 月 27 日、読売新聞と共催で「京都国立近代美術館」で「ロートレック展」が開かれていました。そこに展示されていた「マルセル」という絵画ですね。当時の時価で 3500 万円相当ということですが、これが盗難に遭いまして、当時の当番だった守衛さんが自殺するという悲劇を呼んでいます。

これも犯人が見つかっていませんので、実況見分などからなんですけれども、どうも守衛さんの交代の時間を狙って展示室に入って、「マルセル」を壁から外して持って逃げた、と。南へ 150 メートルほどに琵琶湖疏水<sup>そすい</sup>という小さな川がある、そこまで逃げて、そこで額縁を外して絵だけを持って逃げました。疏水のところから、額縁だけ発見された、ということ。

これは朝ですから、目撃者がいたのかどうか、モンタージュ写真が作られたということなんですね。また、ICPO（国際刑事警察機構）を通じて、38 カ国にも及ぶところに特別手配をしましたが、残念ながら見つからず犯人も出て来ず、そのまま昭和 50 年 12 月 27 日、時効になりました。

この手の時効は 7 年間なんですね。翌年の 1 月 30 日、時効成立から約 1 か月後、「それと知らず預かっていた」という人が、朝日新聞社の大阪本社にこの「マルセル」を届けました。

真相は全く不明のままに、現在にいたっています。

読売新聞社は懲りずにといいか(笑)、その後また「ロートレック展」を開催します。

14 年ほどたった、昭和 57 年の 10 月から、58 年 3 月まで。今度は巡回展で、東京の「伊勢丹デパート」の中にあつた「伊勢丹美術館」、「福島県文化センター」「福岡市美術館」、さすがに京都は同じところではやらずに、「京都市美術館」を巡回するという「ロートレック展」をやりました。

この時にも、さっきの「マルセル」が、出品されました。

この「マルセル」を所蔵していた美術館がフランスの「アルビ美術館」というところで、トゥールーズの「ロートレック美術館」ともいうんですが、ここに返却されていたのですが、返却後わずか 6 年でまた貸出してくれたんですね。この美術館の理事の方は、自殺した守衛さんへの思いから、また出品した、と語っていたそうです。

また戦前に戻りまして、「上野動物園」の最大の事件とされる出来事です。

これは小森厚<sup>こもりあつし</sup>さんという方が書かれた『もう一つの上野動物園史』(丸善ブックライブラリー236 1997)の中に詳しく書かれているんですが、昭和11年7月24日の事件です。

この「上野動物園」のクロヒョウ脱出事件というのは、昭和11年に日本で起こった3大事件の一つだ、ということです。

他の2つは、2・26事件と阿部定<sup>あべさだ</sup>事件。最近、男性が男性のシンボルを切り取るっていうことがありましたけれども、これは女性が切り取ってしまった、大変話題になっていた事件だそうですね。それと並んでいる。

この年、昭和11年は、ベルリンオリンピックがありまして、そこで、例の前畑<sup>まえはたひでこ</sup>秀子、「前畑ガンバレ!前畑ガンバレ!」というラジオのアナウンスがあったと、歴史で習ったんですけれども、そういうことがあったり、また、田島直人<sup>なおと</sup>の三段跳びでしたか、そこで金メダルを取っている。金メダルを取る、っていったら、相当な出来事ですよ。今朝、ですか、内村君が体操で6連覇したというものすごい報道もありましたけれども、そんなのを乗り越えて3大事件の一つです(笑)。

この時はですね、一週間雨戸を閉めたまま、怖かった、というような思い出を語る人もいたんですけれども、実際にはクロヒョウが脱出したことがわかってから、捕獲されるまでは12時間半ほどだったんですが、しかしその記憶が一週間にも及んだというふうに増幅されるくらい、大きな出来事だったんでしょうね。

逃げ出したクロヒョウ君、これは5月18日に上野に送られてきたばかりで、そもそも野生で捕まえられたものが送られてきたということで、人にも慣れていないし、まだまだ人見知り、っていいんでしょうか、運動場に出るっていうこともなかったそうです。

逃げ出した7月24日、7月の末ですから、まだ梅雨が残っていたのか、あるいは梅雨が明けても非常に暑い時期ですね。

暑さがひどいということで、クロヒョウの寝室と運動場の仕切りの戸を開けたままにしておいた。つまり、いつでも運動場に出られるようになっていたということです。そして、運動場の檻<sup>おり</sup>の一部、一か所が少し広がっているところがあって、クロヒョウの頭がやっと通るくらいの間隔があった、と。おそらくそこから脱出したのだらうといわれます。

脱出したことがわかって、警視庁特別警備隊、通称、新撰組とっていたそうです。軍用犬協会、日本犬保存会、猟友会、場合によっては射殺しようということだったんでしょうか。警防団、こんなのが参加して搜索しまして、上野の山では戊辰戦争以来の大騒ぎだった、と。そこに新撰組が出て来るのもなんだな(笑)、と思いましたが、そういうことだったようです。

搜索していた結果、動物園と現在の「東京芸術大学」である美術学校の境のところにあ

る旧千川上水せんかわじょうすいのですね、これ暗渠あんきょっていつてるんですが、入って行くところ、上の蓋がなかったと、ここに足跡らしきものが発見された。そういったところから、どうもこの上野公園の中の暗渠あんきょに潜んでいるのだらうと、そういうふうに目を付けまして、マンホールをひとつひとつ蓋を開けて、搜索を始めました。

そうしたところ、午後 2 時 35 分、マンホールの下したの暗渠の中に、暗い中に、ふたつの光る目を発見した。

この発見した場所、現在は「東京都美術館」の建物たてものの下したになっています。

さて、どう捕まえようか、と。クロヒョウはマンホールというか暗渠の中うちに入っているんですね。見つかったところの次のマンホールは障害物しょうがいぶつでこう防ぎます。このブロックの壁はもっとこっちにシなくちゃいけなかったんですが。ブロックして、もうここから行けない。それから、足跡あしあとの見つかった開口部くわくぶから、この盾を、マンホールの穴全体けつぜんたいにわたるようにしてトコロテン方式たつじんしきだと考えたらしい。こういうふうにして、盾を作つくって押して行くと。

一か所、マンホールの上うへに檻おりを付けておいて、追い込むわけです。盾の真ん中に穴を開けて、重油じゅうゆをつけたたいまつをちょっとだけ赤い火を付けましたけど、そこから煙を出して、いぶして追い込んでいく。そして、檻の中うちに入れる。無事に捕獲とらわ致いたしました。

この盾を押し込んだのが「上野動物園」の職員しんくいんですけれども、草相撲くさすもうで大関おおいを張はっていたという、たくましい原田国太郎はらだくにたろうさん、当時 40 歳さいの方が押し込んだ、ということで、無事、捕獲とらわできました。

後日談ごじつだんがありまして、その 5 日後ごにちのち、今度はシカが脱走だつそうしちゃったんですね(笑)。脱走して、上野の山やまを駆け下りて、上野ひろこうじ広小路ひろこうじのところまで、逃走たうそうしていきました。ところが、このシカはかわいそうに大勢おほしの野次馬のよじうまに取り囲とりこまれまして、取り押おさえられまして、そこでショック死しよくくわいしてしまいました。

このことも合わせて、クロヒョウとシカと脱走だつそうが続ついた、ということですね、当時の動物園どうぶつえんの責任者せきにんしやだったのは古賀忠道こがただち主任技師しんしんぎしで、主任技師しんしんぎしという肩書かたがきの責任者せきにんしやの方に 5 円の過怠金かたがね、罰金ばつぎん。別に、罪つみを犯かしたわけじゃないから、罰金ばつぎんではないんですが、一種いんしゆの処分しふんがされたわけですね。

当時の古賀こがさんの年俸ねんとう、給料きりうは年に 1800 円えんだったということです。

ちなみに先程さきほど活躍かつやくした原田はらださんには、多分たぶんこの 5 円えんがそのままいったんじゃないかと思うんですが(笑)、特別賞与とくべつじやうよがもらえたということでした。

また、この時に責任者せきにんしやが「主任技師しんしんぎし」という肩書かたがきというか、そういう役目やくめいではまずいだろうという認識にんしきが広がりまして、このことがきっかけきかっけになって正式せいしに「園長えんちやう」という制度せいど

が設けられました。翌年の 1937 年の 3 月 1 日、古賀忠道さんが 34 歳で初代の園長さんになりました。

私も小さい時の記憶になんとか残っているのですが、「上野動物園」の園長さんっていうと、古賀さん、古賀園長っていうのが記憶に残っております。1962 年まで園長さんを受けられました。

問題は例のクロヒョウ君ですが、彼はその後、4 年間生きて、1940 年 5 月 12 日、下あごにできた腫瘍が原因で死亡したということです。

さらに最近の出来事ですが、「いわし博物館」が爆発するという事件がありました。

平成 16 (2004) 年の 7 月 30 日午前 8 時 57 分頃、千葉県山武郡<sup>さんぶぐん</sup>九十九里町片貝、ちょうど、九十九里浜の真ん中辺ですね、ここにある「九十九里いわし博物館」が爆発した、という 119 番への通報がありました。

鉄筋コンクリート平屋建ての約 800 平方メートルの建物の屋根の一部が吹き飛びまして、壁の一部が破壊されていました。

爆発は建物東側にある文書収蔵庫で起きまして、この時、この収蔵庫には空調用のガスボンベが置かれていたということです。

お気の毒なことに、この時、臨時職員で学芸員の<sup>ながたまきこ</sup>永田征子さんという方が瓦礫の下から発見されて、亡くなりましたし、もう一人の臨時職員<sup>かわしまひでおみ</sup>の川島秀臣さんは全身やけどの重傷を負い、重体となりました。

爆発の衝撃なんですけど、駐車場がすぐ前にあるんですけど、そこに置かれていた観光バス、乗用車合計 9 台が、飛んできたコンクリート破片で大破したり、それから横に町役場があります。この 30 メートルほど離れた町役場の駐車場、それから近くの水田にも、瓦礫が飛び散ったということでした。

この、亡くなられた永田さんですが、爆発が発生してから 1 時間 20 分ほど経って、爆風で倒れたコンクリートの壁の下におられるのが発見されました。この時、ファイバースコープが使われまして、おそらく、人の捜索にファイバースコープが使われたのは始めてじゃないか、といわれるくらいです。そのファイバースコープで確認されたんですが、残念ですが、1 時間後に亡くなったことが確認されました。

この「いわし博物館」、私は好きな博物館のひとつだったんですが、簡単に、どんなところだったのか、というのを紹介します。

PHP 研究所で出した『博物館ガイドブック』の中の文章なんですけど、「いわしの町として知られる九十九里浜のいわし漁は、江戸時代から 380 年の歴史をもつ。博物館はそのあゆみを物語る古文書をはじめ、いわし漁の歴史、漁具や漁網などいわし漁に関連した品々を

保存している。「いわしの生態」では36種類に及ぶいわしの仲間の紹介や2000年前から生存していた歴史・生態の解説を行っている。「海」では九十九里浜でいわし漁が発達した自然要因を海流・気候などからさぐる。「人」のコーナーではいわし漁に携わる人々の暮らしを祭り道具や古文書などを通して紹介している。また、いわし漁を支えてきた九十九里浜の自然・文化もあわせて紹介。」と、そんなところです。

当時の写真がガイドブックなどに載せられているものも紹介します。私も行ったことがあります。この博物館は館内で写真撮影禁止という表示が出ていまして、写真を撮っていませんので、ガイドブックに載せられているものなのですが、これ、建物の外観、これは今もそのままです。使った船、それから方<sup>まいわ</sup>祝いの展示とか、これは船のポンプというかエンジンですね。焼<sup>やきだま</sup>玉エンジンがこれ。こんな展示だったようです。

何で爆発したんだ、っていうと、3日間の現場検証が行われまして、爆発の原因は天然ガスによる、と断定されました。

九十九里平野一带というのは天然ガスの産地でして、少量の天然ガスっていうのは、いたるところで噴き出しています。いたるところ、っていうのは、家の中でも出ますし、田んぼでもボコボコ出て来たりしていますし、これをそのまま使っている人もいるくらい。濃度が5~15パーセントくらいで引火する地中の天然ガスがエアコン排水用の直径8センチメートルの床に空けた穴から収蔵庫の中に入り込んでたまっていて、それが爆発した。

事故当日、収蔵庫の燻<sup>くんじょう</sup>蒸というか、それをする予定があったようで、家庭用の「バルサン」みたいなものでしょうか、蓋をこすって着火する、そして煙を出す、という防虫剤を試す予定があったということで、それを使って引火したんじゃないか、というふうに考えられました。

先程、収蔵庫の中にガスボンベがあったと紹介しましたが、どうも、それではなかったようです。

これ、怖いですね。このあたりにいた人たち、どのあたりにいても爆発の可能性があるという。なんか爆弾の上に生活している、というふうに思うんですが、その辺はうまく処理されているんだと思います。

最近、行ってきました。現在、建物はそのまま残っています。

ここに張り紙がありまして、これ「いわし博物館」からのお知らせ、ここに平成16年7月30日に爆発したので、未だ開館することが出来ない状態にあります。ご迷惑をおかけいたしますが、なにとぞご理解くださるようお願い申し上げます。と書かれた張り紙が貼ってあります。房総のこの地域の観光的な建物のひとつだったそうで、そのことを示す小さ

な石に書いた建物百選というような表示がありました。

この博物館は未だ開館することが出来ない状況ですが、復活していきまして、九十九里町では「九十九里いわし資料館」、今度は博物館ではなく、資料館という名前のものを今年の3月にオープンしています。

「道の駅九十九里」、じゃない、「海の駅九十九里」。道の駅の中にもいくつか博物館作られていますけれども、ここは港のすぐ横にあります。その建物の中にありまして、右側、この建物の中の資料館というところの入り口ですが、イワシが回遊しています。回遊する、っていうともっと大きなものを期待したいのですが、イワシはこの中、グルグルまわっています。

入口を入れて、左上から入って、右側にイワシ漁のさまざまな状況の大きな写真のパネルがあったり、左下、九十九里のイワシ漁のルーツみたいなことを探っていくたり、それから右側、漁に使ういろんな道具が置かれていたり、それから、先程の博物館のときもありました、<sup>まいわ</sup>万祝いの展示、それから、建物、船、ですね。

それから、これが一番大事な展示じゃないかと思いますが、さまざまなイワシの種類を紹介するところとか、イワシの生態を展示するとか、イワシの食べ方、そんなことを紹介したものがありませんでしたけど、おそらく、ものが並べてあるだけの場ではないか、と思います。

「いわし博物館」と「資料館」とどう違うか、ということをおっしゃるんですが、博物館時代には先程、不幸にして亡くなられた方もいらっしゃいましたけれども、一応、臨時職員であっても、学芸員という立場の方がおられて、亡くなられた方はそれ以前に、今の天皇陛下だったかな、がおいでになった時にも説明したりした方なんです。この「海の駅資料館」の中で、果たしてそういう役割の人がいるのかどうか、そこまで確かめはしませんでしたけど、おそらく、ものが並べてあるだけの場ではないか、と思います。

それと似たような事故がもう1件、平成16(2004)年の7月3日に高崎市の「観音塚考古資料館」というところで、同じように収蔵庫で火事が起きるということがありました。

一番下に書きました、この資料館は重要文化財の「<sup>こうずけのくにやわたかんのんづかこふん</sup>上野国八幡観音塚古墳」出土品というのが300点ほどあります。こういうものなんですが、<sup>どううけだいづきふたわん</sup>銅承台付蓋椀とか<sup>が もんたいしんじゅうきょう</sup>画文帯神獸鏡とか<sup>こんどうせいしんしょうけいすかしぼりきょうよう</sup>金銅製心葉型透彫杏葉。馬具ですね、これは。こういうものが重要文化財になっていまして、ここが火事を起こしました。

火が出たときは館内の燻蒸作業を実施していきまして、いったん終わった段階で、ガスを強制的に排気する為に、小型の送風機を収蔵庫内に持ち込んで、ガスを排気していた。

ところが、持ち込んだモーターが老朽化していたということで、これが加熱して火災を起こしたということです。

発見が早く、ハロゲン化ガスの消火装置で無事消火できました。

ちなみにこのハロゲン化ガス、これは現在、使ってはいけないことになっているガスです。フロンガスの一種でして、オゾン層を破壊しますので、使ってはいけないことになっているガスですが、もうすでに入れちゃったところはいい。多分当館でも、消火装置に使っていますけれども、新しくは使ってはいけない。ですが、消火には非常に有効なガス。

無事に消火できまして、ススが付く程度の被害で済んだということでした。

そして、一番最近の事件というか事故というか、新潟市の美術館であった出来事です。

2009年7月31日の朝日新聞の記事ですが、これまとめたものがあるので、読み上げてみます。

「自然豊かな新潟の魅力を発信する「水と土の芸術祭」の一環で新潟市美術館に展示中の土製作品にカビが発生している可能性が高いことが分かった。美術専門家は「水分を含んだ作品を美術館内に持ち込むのは非常識」と指摘。館内で製作された巨大な作品だけに運び出すのも難しく、新潟市などで行く実行委員会と作家らは31日、対応を協議している」と書かれています。

この「水と土の芸術祭」7月18日から開催されていまして、12月27日まで開催。その間、13か国のアーティストが製作した71作品が市内各所に展示されるということで、そのうちの展示箇所の一ヶ所が「新潟市美術館」になりまして、そこでカビが発生した、と。

どんな作品か、というと、こういう作品なんです。これは何かといいますと、左官職人でもある久住有生さんくすみなおきという方が作ったもので、「土の一瞬」と題する作品です。

左官職人、つまり壁を塗る職人さんですから、壁土を使ったアートですね。

わらを混ぜた土を塗った高さ2メートル、幅が9メートル、厚さ60センチの土壁です。これが7月16日にこの場で完成をしていました。土の壁ですから、作った時は濡れているわけですね、当然。それがだんだん乾いて、ひびを生じていく、ひび割れて行くという過程も見所ということです。

これにカビが発生してしまったわけですが、美術館の中にカビの発生原因があったわけではない。

なんで発生しちゃったかというところと空調施設が不十分で、適切な湿度を維持しにくいといった問題があったようです。

その経過なんですが、先程の新聞報道7月31日。事が発覚して、公になったのがこの日ですね。その前の7月22日、展示室の監視員の方がこの壁の表面に白い付着物があるのを発見しまして、学芸員に連絡をしました。確かにそういうのがあるということを確認しました。翌日には最大直径9ミリ、1センチ弱のものが20ヶ所以上あるということが、確認

されました。

これを、学芸員・職員が取り除きましたけれども、その後も湿った部分や隣室、他の部屋の土製作品でもそういった白いものが見つかった、と。

展示室は日中は湿度は 55 パーセントに保たれています。55 パーセントというのは、博物館・美術館などの資料の保全のための湿度の条件として、普通にいわれる数字ですね。

日中はそれでよかったんですが、夜間は空調を止めるということをしていたようで、その間、7月後半ですから、湿度の高い時期です。それでどうも夜間は梅雨の影響もあって湿度が 80 パーセントくらいにまでなっていた、ということでした。

作品の設置をするのに立ち会った職員は、これは水気がある作品だから、カビが生える可能性というのは予測していた。だけど問題は夜間で、空調を調節する要員が確保できなかった為に空調を動かさなかった。そこで、外気を取り入れて換気するという方法を取っていたんだ、と。

でも、外気っていったって、外気も湿度高いですから、換気してもどうなのだろうか。

7月23日以降、ここは24時間体制で空調を稼働させてきたということです。

7月24日に、館長にやっと報告がありました。

この館長さんは、北川フラムさんという作家であると同時に、美術展などのコーディネーターとして非常に有名な方です。館長に報告があって、それから文化観光スポーツ部長とか、文化政策課長、交流推進課長、要するに新潟市の人たちに報告がいきました。

その5日後ですね、ようやく7月29日に交流推進課というところから、市長に報告が行われています。それを受けて31日に毎日新聞が報道をしています。

これで終われば、まだ良かったのかも知れませんが、翌年の2月、今度は展示されているものの中から、クモが見つかった、と。

「新潟への旅」という企画展の中で、展示作品に「新潟—水の旅」という作品がありました。これは「エコ電動カート」だそうで、この中にクモがくっついていました。

これもですね、美術館の中に、このクモの発生原因があったわけではない、とありまして、作品を電動カートで搬入する前に、一応、目視で確認をして異常がなかったということを確認しているんです。そこで搬入した、と。

この新聞記事には「クモ大発生」と書かれていますけれども、どのくらい発生したか。生きたクモ1匹が2月16日に発見されて、捕獲しました。4日後には、また3匹見つけて捕獲。次の日もまた1匹捕まえた。

この電動カートを翌日22日にブルーシートで覆って、そのブルーシートの中で「バルサン」を炊いて、その中の空間を燻蒸した、と。

そうしたところ、クモが 16 匹と小さな甲虫 2 匹の死骸がそこから発見された。これ、大発生ですね。さらにまだまだクモの死骸が 3 匹、生きたクモが 1 匹、甲虫 1 匹。ようやくこの段階になって、このカートを館外に移動しました。

まだ止まない。26 日にまたクモ 2 匹を発見し捕獲した。最初の発見から 10 日後、館長に報告があった。

もし、同じ館長の立場で、自分のところでこんなになったらどうしようと、読んでいてちょっと怖くなったんですが、ここでは、そんなことはないと思います。私、毎日ここに居るわけではありませんけれども、連絡は、何かあるとメールを通じてでも、電話でももらっていますので、こんなことはないだろうと思いますけど、後でこの体制が実は指摘されることになるんです。

3 月 4 日になってこれも市長に報告。また、毎日新聞が報道しました。

都合の悪いことに「新潟市美術館」では、この直後、国宝を展示する特別展が予定されていたんですね。

そこで、美術館から、東京の「文化財研究所」に対して、国宝を展示するにあたって再調査をする必要があるだろうか、という問い合わせをしたところ、取りあえず現在あるものは全部除去したのだからいいよ、ということで、そのまま国宝をめぐる、仏像だったかな、展覧会を開催する予定で進んだんですが、さすがにそのままやるということには批判もあり、また美術館自身もまずいと思ったのか、残念ながらその展覧会はここでは開催されないことになりました。

新潟市ではなく、確か、長岡の博物館のほうで実施された、ということのようです。

カビとクモですが、この今回のカビとクモは館外から運び込まれた展示作品に付着していた、あるいは展示作品そのものが発生原因となるようなものだった、と。

だから空調の問題はあったにせよ、展示室自体にそういった要因があつたわけではない。それからまた、来館者に問題があつたわけでもない。

展示作品が生物因子や有害物質を運んだという特殊なケースだといえます。

一般に博物館・美術館の展示室は、不特定多数の観覧者が頻繁に出入りする場ですね。

博物館・美術館、これは地域の人々にも開かれた存在である限り、人に付いてそういった原因物質が持ち込まれるってこと、これは当然ありうるわけです。

人って、ひどいんですよ。資料にとってみると(笑)。だって、ヒト自体が 36 度から 37 度の発熱体でしょ。おまけにこんなところにいろんなものくっつけていますしね。それから、口からは二酸化炭素という有毒ガスを吐き散らすわけです。

そういう存在のものが常時出入りする場が展示室ですね。そういうところで、一般者が

そういうものを持ち込むということは容易に考えられることですが、今回はそうではない。

この問題をきっかけにしまして建物の老朽化っていうこともあったのか、外壁とか扉とか窓の隙間をしめる工事をしたり、それから外気の混入を防ぐようなことをしたり、それからまた展示室の気密性を高める様な処置をするようなことになりました。

こういう館内の設備の改善を図るといようなことで、今回のような問題が最発する可能性は低いというふうに美術館ではみていました。

これの問題を受けて新潟市は、「市美術館の評価及び改革に関する委員会」という組織を立ち上げました。委員長は<sup>かなやまよしあき</sup>金山喜昭さん。法政大学の先生ですが、博物館学の先生です。

ここで議論をしまして、その結果、課題は4つあった、というふうに考えています。

それ以前にこの展覧会で生じたこと、現代美術ですね。現代美術の表現活動というのは、これまでの美術館ではありえないようなさまざまな材料を使って、さまざまな可能性を追求するわけです。

例えば、水・土・植物・動物、例えばゴミすらも、作品そのものの表現の媒体となっていくことがあります。現代の美術館、特に公立の美術館というところでは、市民に対してそういう先端の芸術を見せるということはこれは一つの役割でもある。そういう現代作品を展示することがあっても、当然いいわけです。

私自身も現代美術といとなんだかわからない、というのが正直な感想ですけども、しかし、見る人を見ると、とつてもいいものだ、と。それから、そういうものをみてしっかり解釈をするという目を持っている学芸員が、必ず必要なんです。

そういう現代美術であっても、これらが文化財を保護するための環境条件を悪化する可能性があるという場合には、当然これは展示室ではなくて、エントランスで展示するとか、あるいは屋外で展示をするとか、そういう工夫をすることが必要だろうと。または、徹底的な清掃・乾燥・<sup>くんじょう</sup>燻蒸・薬品処理・空調への対応、こういった工夫をする必要があるはずなんです。

今回の「新潟市美術館」での場合は、美術館でこういった土の壁などを展示するという事自体は問題はなかったんですが、しかし、その作品からカビやクモが発生する、…クモは発生じゃなくて持ち込まれたものですけども、そういうリスクというものを想定できなかつたんじゃないか。また、そのリスクを軽減するための努力を怠ったというところが問題だったようです。

そういったことの検討の上で、この事故にまつわる課題というものを4つ、この委員会では指摘したわけです。

「展示の準備作業にあたって、作品からカビやクモが発生するといような特殊なリスクを想定していたかどうか」

「展示室に作品を入れる際の清掃をきちんと行っていたか」

「発生の第一報に接したあとにとった措置、これは迅速かつ適切なものだったのか」  
「事故発生直後に美術館と市役所本庁は十分な連携体制をとっていたのかどうか」  
という 4 つの点を課題として挙げました。

この調査委員会の報告書の中から、これらの 4 つの課題に対してのことをさらに挙げて  
いまして、

一番目の、リスクの発生ということが想定できていたのか、していたのか、ということ  
については、これはリスクの発生を盛り込んだ上の事前の検討ということが、十分には行  
われていなかった。

館長を含め、学芸担当スタッフも、リスク発生の可能性というのを想定していなかった。  
館長が出てきます。館長の北川さんという方は現代美術の専門家でもありますし、先程言  
いましたように、新潟県の美術関係のイベント、単なるイベントじゃないんですが、地域  
おこしのためのさまざまな活動に非常に力を発揮していた人です。

二番目の、展示室に作品を入れる際の清掃などについてはどうだったのか。これはカビ  
問題については、生の土の湿気の残り具合と空調管理によるカビ発生の因果関係、これを  
予見すべきだった。言ってみれば空調 24 時間ちゃんとやっているべきだった。あとからや  
っても遅かった、ということですね。

また、クモ問題についていうと、リスクは予見すべきだっただろう、と。これはもう、  
燻蒸もせずにその電動カートを展示室の中に運び込んでいるわけですね。目視で、危険は  
ないということを見たということだろうけれども、目視で見て取れないところもあったん  
だろう、と。

リスクの認識ということがあまりなかったために、燻蒸とか分解掃除といった対応をし  
ていなかった。通常の作品と同じように、ただ外から持ち込んでしまったということも、  
指摘されました。

それから、3 番目の要点。これは発生の第一報のあとにとった措置は適切かつ迅速であっ  
たか、と。

これについては、監視員がカビやクモを発見・通報して、学芸担当者が担当スタッフが  
カビの除去、ここまでは問題なかったんですけども、館長へあるいは本庁へ、市長への  
報告ということが非常に遅かった。問題が発生した時点で、「展示作品の撤去」の可能性を  
検討すべきだったのですけれども、それも館長との連携ということがうまくいかなかった  
こともあって、だめだったということですね。

4 番目の点。事故発生後の美術館と市役所本庁との連携体制ということについてですけれ

ども、これも先程紹介したように非常に報告が遅れた、対応も遅れたということで、緊急連絡体制が充分には機能していなかった、ということを指摘しました。

この事故は全体として「公の施設」である美術館の管理者という意味において、非常勤であっても館長に大きな責任がある。

それから、副館長以下、建物の管理そのものを担う副館長以下の事務スタッフ、学芸担当スタッフのそれぞれにおいても、感度の鈍さということをいっていますけれども、意思疎通の問題があった。事故発生後の危機管理体制、これは全く不備だったということで、この報告書はまとめられています。この後、館長は交代しています。

こういうことがあって、他の館での出来事だというふうに思われがちになりますけれども、資料の保全のための展示環境、それから収蔵環境の保持というのは、これは当然やらなくちゃいけない当たり前のことなんですけれども、それでもさらになお、常に気を遣っていかなければならないんだということを、改めて再認識させる出来事だったというふうに思います。

戦前から戦後、現在に近いところまで、起きた主な出来事と事件というものを、いくつか紹介して参りました。

用意した話は、今日はこのくらいであります。

ちょっと時間がありますが、何かご質問など、今日のお話でも、他のところでも、おありになりましたら、どうぞ。…いかがでしょうか？

よろしいですか。

それではちょっと早いんですけども、これで終わりに致します。

どうもありがとう。

(拍手)